第Ⅰ章　序　　言

A　頭塔とは

頭塔は、土を盛り表面を石で覆い44体もの石仏を配した、日本では希有の仏塔である。　**希有の仏塔**

東大寺南大門から南へ約1㎞、新薬師寺訪問の際によく利用する破石バス停の西方、奈良市高畑町字頭塔921番地に所在する。かつては木の鬱蒼と茂った背の高い方墳状を呈していたが(PL53)、現在では北半分が発掘調査成果に基づいて復原整備され、階段ピラミッド状の異様な姿は、はじめて訪れた人を驚かせる。各面に整然と配された奈良時代の石仏は名高く、遺跡は国の史跡、石仏は重要文化財に指定されている。

「頭塔」の名は、平安時代末にさかのぼり、大江親通（？～1151）が嘉承元年（1106）と保延6年（1140）に南都を巡礼したときの記録『七大寺巡礼私記』に、奈良時代の僧玄昉の首塚と記す。玄昉は唐への留学僧で、帰国後吉備真備とともに橘諸兄政権のブレーンとして活躍したが、二人の政敵であった藤原広嗣の反乱の平定後、筑紫観世音寺に左遷された。その玄昉が広嗣の怨霊に呪い殺され、五体ばらばらになって、都の5ヶ所に落ち、その首を埋めたのがこの　**頭塔の由来**
「頭塔」であるという。この伝承は江戸時代まで語り継がれてきた。奈良町の地名「肘塚」も同じ話にちなむ。しかしこれは伝説にすぎず、神護景雲元年（767）に東大寺の初代別当良弁が弟子の実忠に命じて造らせた「土塔」に当たるとするのが、板橋倫行（1929）・福山敏男（1932）が唱えて以来の通説である。「ドトウ」がなまって「ズトウ」となり、玄昉伝説と結びついて「頭塔」と呼ばれるようになったのが真相らしい。

頭塔の構造については、表面観察と地形測量の成果から、1960年代までに数段のテラス状平坦面と敷石、仏龕や瓦葺屋根の存在が推定されたものの、隔靴掻痒の感は免れなかった。

1978年にごく小規模な調査で、東面基壇と第1段石積の一部を検出したのを皮切りに、1987年に奈良県による復原整備事業に先立つ発掘調査（担当奈良国立文化財研究所）が本格化した。1986年度と1988年度で北半分を全掘し、規模・構造・変遷の大要が明らかとなり、奈良県が復原整備基本計画を策定した。1992年度から石積の解体・修理・復原と、それに伴う補足的調査が始まったが、1991年度の東面中央部の断割調査で、下層頭塔の存在が判明した。その様相を明らかにすべく、1996年度に東南部と頂上部を調査した。

発掘調査の成果は、本書に余すところなく報告したので、詳細は本文に譲るが、頭塔について誰しも疑問に思うのは、次の諸点であろう。①下層と上層の築造年代はいつか。②実忠が築造に関わったのが事実とすれば、それは下層か上層か。③下層と上層の建築的構造の違いとその理由。④築造の土木的工法に特色があるのか。⑤瓦や石材はいかに調達したか。⑥上層は44体もの仏像でいかなる教学的構想を表現しようとしたのか。⑦下層と上層で造像の教学的構想は異なるのか。⑧造塔の宗教的・政治的背景は何か。⑨頭塔の築造地選定理由は何か。⑩頭塔と東大寺・興福寺との関係、およびその歴史的変遷。⑪玄昉の真の墓所はどこか。

本書では、不十分ながら、こうした点にも極力考察を及ぼすように努めた。

B 調査経緯

頭塔は文献史料に基づく調査研究により、奈良時代の神護景雲元年（767）に東大寺の僧、実忠が造った一種の仏塔であるとされていた（福山 1932）。現状の実測調査も行われ、五層の塔とする復原案も提示されている（石田 1958）。しかし、その実態については推定の域を出ず、奈良時代の石仏としては著名であったが来訪者も少なく、遺跡としての存在もごく限られた人々に知られているにすぎなかった。一方、頭塔は明治初期の上地令により国有地となり、1922年の史跡指定以来、奈良県がその管理にあたってきた。遺跡と石仏の保護を主眼とする柵の設置などの施設整備はなされてきたが、管理体制などの面からも積極的な公開、活用はされていなかった。

こうした中で1978年に指定地の東隣接地にあった奈良地方法務局の移転に伴い、跡地につくられる施設の事前発掘調査（平城宮跡第114次）を行った。この調査では頭塔の東辺部にもトレンチを入れ、Ｅ０ｗ（記号はD参照）とＥ１ｗを確認するとともに、Ｅ１ｃ石仏の北側で新たにＥ１ｂ石仏を発見した。これにより頭塔には基壇や本体に石積があり、未発見の石仏がさらに埋もれている可能性が高いことがわかった。

以上のことを背景として奈良県教育委員会は、頭塔の本来の形を解明し、その成果をもとに整備し、より広く公開することを構想した。ただし頭塔の森としての現状にも価値を認め、南半分は現状のままとし、北半分についてのみ発掘調査、整備するという基本方針を固めた。

整備の方針

北半分を調査、整備の対象とする基本方針の考え方をさらに詳しく述べよう。

まず、頭塔の現状であるが、頭塔の南側は全体に急な崖となっている。特に東南部と西南部は後世に宅地化された際に侵食され、頭塔の基壇土はすでに失われている可能性が高い。崖下には民家が迫り、このような場所を発掘調査なり、復原整備するには大きな危険を伴う。また頭塔本体の東南部には、近世に「頭塔寺」という寺があり、このため頭塔本体をも削り込んでいるなど、遺構の残りが期待できない。頭塔の南面の裾には近世の五輪塔などが立ち並び、現在もここでは時折、法要が行われるなど、宗教的空間としても機能している。このように南半部は調査、整備いずれの面でも問題が多々あった。一方、北半部にはこうした問題がなく、基壇の外と推定される部分にも狭いながらも平地を確保できること、遺構の保存状況にも期待が持てることなど、調査、整備の条件を備えていた。

第二は緑としての頭塔の存在である。カシなどの常緑広葉樹に覆われた頭塔は全体がピラミッド状をなし、木々の間に石仏が見えている現状である。緑の存在感とともに遺跡としての歳月を経た美しさも備えていた（PL. 53）。このような現状に対する愛着も根強く、全体を丸坊主にしかねない発掘なり、整備には強い抵抗があった。

緑の保存

発掘調査は「史跡頭塔」の管理団体であり、今回の発掘調査、整備工事の主体である奈良県教育委員会が自ら行うのが本来であろう。しかし、頭塔の現況実測調査（森・牛川 1962）や発掘調査（平城宮跡第114次）については奈良国立文化財研究所が以前から取り組んでおり、また、今回は単なる発掘調査ではなく、その後の復原整備が伴うこと、復原整備に際しては石積の解体に伴う発掘調査が予想されること、同一機関による発掘調査と復原整備の指導が行えるのが望ましいこと、などの理由から、奈文研が発掘調査を担当することになった。

C　報告書作成

今回報告するのは、奈良県立老人福祉センター（現飛火野荘）の建設に伴う第114次調査と、奈良県による史跡頭塔復原整備事業に伴う第181・199・232・237・247・257・264・277・282-15次調査の計10回分の発掘調査成果である。各発掘調査の責任者（所長・部長）と直接の担当者をかかげ、その他の関係者は一括して列記する。

次　数	発掘年度	所　長	部　長	発掘調査担当者
第114次	1978年	坪井清足	狩野　久	森　郁夫　吉田恵二
第181次	1986年	鈴木嘉吉	町田　章	高瀬要一　花谷　浩
第199次	1988年	鈴木嘉吉	町田　章	巽淳一郎　佐川正敏
第232次	1991年	鈴木嘉吉	町田　章	高瀬要一　藤田盟児
第237次	1992年	鈴木嘉吉	町田　章	内田和伸　高瀬要一
第247次	1993年	田中　琢	町田　章	小野健吉　高瀬要一
第257次	1994年	田中　琢	町田　章	小野健吉　高瀬要一
第264次	1995年	田中　琢	町田　章	高瀬要一　平沢　毅
第277次	1996年	田中　琢	町田　章	岩永省三　金田明大
第282-15次	1998年	田中　琢	町田　章	高瀬要一　小野健吉

本中　真　綾村　宏　安田龍太郎　田辺征夫　島田敏男　橋本義則　金子裕之　寺崎保広
玉田芳英　森本　晋　毛利光俊彦　臼杵　勲　浅川滋男　杉山　洋　渡邉晃宏　舘野和己
山崎信二　長尾　充　小林謙一

報告書の作成は、1998年６月に発掘調査報告編と復原整備報告編の二本立てで刊行する方針が決まり、発掘調査報告編は同年12月から本格的に作業を開始した。遺構関係の整理は遺構調査室・計測修景調査室と編集者が担当し、遺物の整理は考古第一・第二・第三の各調査室があたり、関係史料の蒐集は史料調査室が行った。作業が本格化してからは数回の編集会議を開き、執筆分担者ごとに整理検討の成果を報告して討議を進め、最終原稿とした。

1）執筆分担は次の通りである。
　高瀬要一…ⅠＢ・Ⅲ３、高橋克壽…Ⅳ４・Ⅴ４・Ⅴ７（Ｆ除く）・Ⅵ３Ｄ・Ⅵ10、石橋茂登…Ⅴ３・Ⅴ５Ｂ・Ⅴ６、内田和伸…Ⅵ１、浅川滋男…Ⅵ３Ｃ、古尾谷知浩…Ⅵ５、肥塚隆保…Ⅴ７Ｆ・Ⅵ９、松浦正昭…Ⅴ２、佐藤昌憲・高妻洋成…Ⅴ３Ｅ、岩永省三…ⅠＡ・ⅠＣ・ⅠＤ・Ⅱ・Ⅲ１・Ⅲ２・Ⅳ１・Ⅳ２・Ⅳ３・Ⅴ１・Ⅴ５Ａ・Ⅵ２・Ⅵ３Ａ・Ⅵ３Ｂ・Ⅵ４・Ⅵ６・Ⅵ７・Ⅵ８・Ⅶ。
2）石仏の記載は、奈良国立博物館仏教美術研究室長松浦正昭氏に依頼しⅤ２に掲載した。
3）琥珀玉と繊維の分析は、奈文研客員研究員佐藤昌憲氏に依頼しⅤ３Ｅに掲載した。
4）英文要旨は原文を岩永が作成し明治大学文学部専任講師佐々木憲一氏に翻訳を依頼した。
5）本書の写真は佃幹雄、牛島茂、中村一郎が撮影を行い、杉本和樹、鎌倉　綾、吉田幸子、生原理恵が協力した。
6）遺物の実測、図面浄書は各執筆が分担したほか、豊島直博の助力を得た。PLAN６の作成には、清水重敦、西山和宏、高田美佳、小倉依子、北野陽子の協力を得た。
7）正倉院古文書「造南寺所解」写真の掲載については宮内庁正倉院事務所の許可を受けた。
8）本文中の人名は敬称を省略させていただいた。
9）本書の編集は、調査部長田辺征夫の指導のもとに岩永省三が行った。

D　記号の説明（Fig. 2）

頭塔は方錘形で基壇上に塔身が乗る。上層・下層の２時期があり、基壇は上面の舗装でのみ上・下層が区別できる。上層の塔身は７段の段台状を呈し、各段の立ち上がり部に石積、段の上面に石敷がある。東西南北の各面の第１段に５基、第３段に３基、第５段に２基、第７段に１基の仏龕（石仏）を配す。１面に合計11基、総計で44基である。下層の塔身は３段と推定でき、各段には石積があるが、石敷の有無は不明である。

それらを「東面基壇の石積」、「西面基壇上面の下層石敷」、「上層南面第４段」、「下層北面第１段」、「下層東面第１段の石積」、「上層西面第５段の石敷」、「上層北面第１段の東から２番目の仏龕」、「上層東面第３段の中央の仏龕」などと表現するのは、そうした表現が頻出するだけに煩雑きわまりない。そこで本書の記述では、段・石積・石敷・仏龕（石仏）を、記号化して簡略に表現することとした。

記号で記述

①上層は何も記さず、下層のみ記号の最初に下層と記す。

②東西南北の面は、大文字でＥ・Ｗ・Ｓ・Ｎと記す。

③塔身の第１～７段は、単に１～７の数字で記す。基壇は０とする。

④石積は「stone wall」の略でｗ、石敷は「stone pavement」の略でｐと記す。

⑤仏龕（石仏）は面ごと段ごとに、向かって右から小文字でａ～ｅと記す。第１段は５基でａ～ｅ、第３段は３基でａ～ｃ、第５段は２基でａ・ｂ、第７段は１基でａのみである。本来の位置を動いたことが明かな２基は、その段のｘとする。

したがって例示した「東面基壇の石積」は「Ｅ０ｗ」、「西面基壇上面の下層石敷」は「下層Ｗ０Ｐ」、「上層南面第４段」は「Ｓ４」、「下層北面第１段」は「下層Ｎ１」、「下層東面第１段石積」は「下層Ｅ１ｗ」、「上層西面第５段石敷」は「Ｗ５Ｐ」、「上層北面第１段の東から２番目の仏龕」は「Ｎ１ｄ」、「上層東面第３段の中央の仏龕」は「Ｅ３ｂ」となる。

石仏については、発掘調査開始以前に１～13号を命名しており、第181次調査で14～19号を、第199次調査でＡ～Ｆ号を命名した。しかし、それらの名は各石仏の位置の情報をいっさい含まないから不便である。上記の新命名法なら、Ｗ１ｅは西面第１段の北端とすぐ判る利点がある。石仏名の新旧対照は次のようになる。矢印の左が旧名、右が新名である。

新名称は便利

１→Ｓ１ｃ、２→Ｓ１ｘ、３→Ｗ１ｘ、４→Ｗ１ｃ、５→Ｗ１ｄ、６→Ｎ１ｃ、７→Ｅ１ｃ、８→Ｓ３ａ、９→Ｓ３ｂ、10→Ｎ３ｂ、11→Ｓ５ａ、12→Ｗ７ａ、13→Ｎ７ａ、14→Ｅ１ｂ、15→Ｅ１ａ、16→Ｎ３ｃ、17→Ｅ３ａ、18→Ｎ５ｂ、19→Ｅ５ａ、Ａ→Ｗ３ｂ、Ｂ→Ｗ３ｃ、Ｃ→Ｗ５ｂ、Ｄ→Ｎ５ａ、Ｅ→Ｗ１ｅ、Ｆ→Ｎ１ａ、

参考文献

石田茂作　1958「頭塔の復原」『歴史考古』２。
福山敏男　1932「頭塔の造立年代に就いて」『考古学雑誌』22-６。
森蘊・牛川喜幸　1962「頭塔の実測調査を了えて」『奈良国立文化財研究所年報　1961』。